

JICA九州ネット

jqn

第4号

秋空、川面を見つめる**Bangladeshi**
バングラデシュ青年研修

他を思うことから インターンの夏

片井菜緒子

国際協力の気持ち インターンの夏

岩野晃子

親子参加型国際交流イベント

地球生活体験学習

外国人の目に映る私達の街

JICA研修員の街歩き

豚と柔軟剤



片井菜緒子

立命館アジア太平洋大学 3回生

私は今年の9月に2週間、大学の夏期休暇を利用して、JICA九州のインターンシップに参加しました。今回の参加を通して、今まで自分の頭の中だけで抱いていた「国際協力」に対する漠然としたイメージが、少し具体的になつたように感じます。また、2週間という短い期間でしたが、JICAの業務現場に同行させていただく中で、JICA事業に関わる多くの方々と出会い、直接お話を出来たことが刺激となり、私の今までの考え方を広げてくれました。

相互にある意義

インターニンシップ期間中、私はJICA九州の研修業務課に配属され、北九州市で行なわれている様々な研修に同行しました。「研修事業の意義を高めるためには」というテーマをもとに出来る限り多くの方々から意見やお話を伺いました。これにより、今まで自分の中で当たり前のように考えていた「国際協力」の重要性や意義について改めて深く考え直すことになりました。JICA事業を知る中で、JICAには多くの民間企業・機関・学校・自治体・地域住民などが関わり、「国際協力」がたくさんの人々により支えられていることがわかりました。私は今まで、「国際協力」とは、途上国にとつて役に立つことだという「一方向だけの考え方しか持つていませんでした。しかし、研修業務に関わる日本の人々のやりがいや、地域の人たちとの交流・共に技術・知識習得に尽力する中で生まれた絆を目の当たりにして、「国際協力」の意義は日本と他国の人々との相互にありますから始まり、人々は協力し合えるのだと考えます。私はこれから生まれる喜びや大きさを再確認したように思います。これは国際協力以外にも言えることだと思いますが、「他を思う」ことから「他を思う」ことになります。私は将来、国際協力に関する仕事に携わりたいと強く思っています。インターネットシップで感じた、自分のことや自分の国だけでなく、周りのことや他の国のことにも目を向けるという「他を思う」気持ちをいつも心に持ち続け、世界中の人々とお互いに「協力」していきます。

常に他を思う感覚

以前読んだ本の中で、緒方貞子JICA理事長が「常に他を思う感覚を持たなくてはいけない」「自分がだけが良くなることはありえない」という考え方を持つ必要があると語っています。今回のインターニンシップから、まさに、この「他を思う」ことから生まれる喜びや大きさを再確認したように思います。これは国際協力以外にも言えることだと思いますが、「他を思う」ことから始まり、人々は協力し合えるのだと考えます。私は将来、国際協力に関する仕事に携わりたいと強く思っています。インターネットシップで感じた、自分のことや自分の国だけでなく、周りのことや他の国のことにも目を向けるという「他を思う」気持ちをいつも心に持ち続け、世界中の人々とお互いに「協力」していきます。

「他を思う」ことから





岩野晃子

九州大学 法学部 3年生



国際協力の気持ち

気持ち、その方向

JICAの中にはいろんな経歴を持つた方がたくさんいらっしゃるが、それがJICAの特徴だと感じました。熱い情熱を持つた人、冷静な目を忘れずを持っている人、もくもくと仕事をこなす人、みんなのそれまでの経験もさまざま、たくさんおもしろい話を聞かせていただきました。ただ、さまざま異なった経歴を持つているため、当然だとは思うのですが、みなさんの「国際協力」に対する考え方にも違いがあつたように感じました。もつとも全員が全く同じ考え方を持って仕事を取り組むということが危険なことだともいえると思います。特に「国際協力」を行うに当たって、国民からの資金をもとに業務を取り組んでいるJICAにおいて、全員が同じ考え方しかできず、客観的な視点を持つた人がいないということに対する考え方の違いが目指す方向性のズレとなり、JICAの指向性を曖昧にしてしまう危険性も持ついるということ、また軽視できないことだと思います。しかし、私は業務体験の中で、さまざまの方々のお話を聞いて、考え方の違いはあつたにしても、「国際協力」に対する考え方の違いが目指す方向性のズレとなり、JICAの指向性を曖昧にしてしまう危険性も持ついるということ、また軽視できないことだと思います。しかし、私は業務体験の中で、さまざまの方々のお話を聞いて、考え方の違いはあつたにしても、「国際協力」を行っている業務にかなりの違いはあつても、みなさんきっと困っている人の力になりたい」という思いがあるからこそ働いておられるのではないかと思ったのです。今回、この短い期間でしたが、学生のうちにこのような貴重な体験をさせて頂けたことに感謝して文を終わりたいと思います。本当にありがとうございました。

国際協力、そのイメージ

「人と人をつなぐ国際協力」そんな理念を掲げていたJICAに魅力を感じました。そんな中、9月の2週間JICAにインターンシップ生として受け入れていただけることになりました。今回はその中で学生である私が感じたことを少し書きたいと思います。

「国際協力」よく聞く言葉ですが、具体的な仕事として思いつくのは貧困に苦しむ国の子供たちのための学校を作る、十分な水を入手できずに農業がうまくいかない地域の人々のために灌漑設備を整えるといったことなどではないでしょうか。私もインターネット・シップに行く前まではそんなイメージしか浮かんできませんでした。しかし、実際にJICAでの業務体験を通じてその業務の多様性に驚きました。研修員受け入れ業務、市民参加協力業務など、今まで国際協力に興味があると言つておきながらほんんど何も知らなかつた国際協力をもう恥ずかしく思いました。一言に「国際協力」といつても、様々な関わり方をすることができるんだということが分かり、今まで一つの面しか見えていなかつた国際協力をもつと多角的な目をもつて勉強しなおす必要があると感じました。これから残された学生時代を使っていろんなものに触れ、感じ考えるという大きなテーマを見つけることができた点において、今回は本当に有意義な体験をさせていただいたと思います。それと同時にさまざまな業務に携わるたくさんの方々と出会うことができました。

■文化、宗教、ことばの異なる国から、年間約600名ものJICA研修員が来る北九州八幡地区。さらにここには九州国際大学の留学生や現代美術センターの研究生など多数の外国人がやってきます。この街は彼らにどのように映るのでしょうか。住みやすい街なのでしょうか？住みづらい街なのでしょうか？住みやすい街ってどんな街なのでしょうか？日本人と外国から来た研修員と一緒に街を歩いたら意外な発見があるかもしれませんと、「八幡の街歩き」を企画してみました。>>>つづく

668
年中無休

豚と柔軟剤

「カップラーメン買いたいんだけど、一緒に来てくれる？」

インドネシアから来た研修員が私に言いました。彼はイスラム教徒、豚は食べません。日本語のみの原料標記では、豚が含まれているかわからず、私に助けを求めていました。

「この洗剤を買ったんだけど、泡立たないのよ。」

中国人の研修員が私に聞きました。彼女の手には柔軟剤がありました。





■国際化、私たちの街は？

初めての街歩きは2月。参加した研修員は中国、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ツバル、キリバスの22名。地元の大学生や北九州在住の元青年海外協力隊員など日本人18名と10人ずつの4グループに別れ、八幡を一緒に歩きました。その後、気づいたことなどを模造紙の地図に落とし込んでいき、グループごとに発表しました。「看板標記がわかりにくい」「植木の囲いは何のため？」「マンホールだと気付かなかった」などたくさん意見が出てきました。研修員も、気になっていたことを聞くことができ、とても楽しかったと大満足の様子でした。この話を「八幡駅前を住みやすいところにしよう」と勧いている（株）八幡駅前開発の井上龍子さんにしたところ、「たくさん研修員や留学生がいるこの地域は本当に住みやすいのか、自分たちも街歩きをしたい！」と盛り上がりました。そして、第2回の実行となりました。

■ちょっとした英語表記

4月30日、晴れ。参加した研修員は、ルワンダ、セルビア、トンガ、バヌアツ、ベトナムの4名。井上さんと九工大の景観工学まちづくり研究室の学生らと一緒に、スーパーや100円ショップなどを回り、気づいたことを話し合いました。「JRの乗り方やバスの乗り方がわからない」「食品の英語表記がほしい」などいろんな意見が出てきます。やはり日本語以外の言語表記、例えば英語の看板などが重要な役割を果たしているようです。JR八幡駅にお話したところ、早速、駅の券売機に英語表記をつけることになりました。翻訳を手伝ってくれたのは、（財）北九州国際交流協会で働くイギリス人国際交流員、サムです。サムも加わり、八幡駅付近の英語マップ作成に取り掛かりました。そして9月24日、第3回街歩きです。今回は九州国際大学の先生と大学生、元青年海外協力隊員や八幡駅前開発の方など日本人5名、国際交流員のサム、バングラデシュ、コロンビア、キューバ、インドネシア、ケニア、スリランカ、タイから研修員8名が一緒に歩きました。JR、スーパーだけでなく、レストランや携帯ショップなどにも行ってみました。そして、「標記が小さい」「看板がわかりにくい」「シャンプーやリンスなど液体の表示が特にわからない」など貴重な意見をもらい、これをお店に還元していきました。そして英語マップも出来上がりました。

■ちがう視点

JICAの研修員や地元の方や大学生たち、元青年海外協力隊員や国際交流員などが参加している八幡の街づくりは、これから大きな広がりを見せるでしょうか？八幡だけでなく、日本全体で今後外国人が増えてくることを考えると、海外の人の視点を基にした住みやすい街づくりの企画は、これからますます大きな意味をもってくることでしょう。

